

## 論文の要旨

論文題目	在日ブラジル人児童生徒のかかえる学習上の問題とそれへの対応
氏名	川口直巳
学位	博士(文学)
授与年月日	平成18年3月31日

文部科学省のいう、「日本語指導が必要な外国人児童生徒」とは、来日して間もない日本語での日常会話ができない外国人児童生徒を意味することが多かった。しかし、「入国管理法」の改正により、日系ブラジル人などの日本滞在が長期化し、現在は、日本語で教科学習内容を理解していくという、短期滞在の頃には必要とされなかった高度な日本語能力が外国人児童生徒に求められるようになった。外国人児童生徒は、日本の教育システムの中で小学校から中学校、さらには高等学校や大学へ進学していくことになり、彼らへの指導も日本人児童生徒と同じく、日本で成長する彼らの将来を見越しての指導が必要となってきた。このように、「日本語指導が必要な外国人児童生徒」の対象となる児童生徒の捉え方が以前と違ってきており、この「日本語指導が必要な外国人児童生徒」の指す範囲が大きくなっていると言ってもいいだろう。外国人児童生徒のこのような新たな状況を把握し直す必要があるのではないだろうか。本研究では、外国人児童生徒の現在の状況を多面的に明らかにし、今後のブラジル人児童生徒の教科学習に関する提案を行うことを目的とした。

本研究では、日本に滞在する外国人児童生徒の中でももっとも数が多いブラジル人児童生徒を研究対象とし、在日ブラジル人児童生徒の現状を把握するため、以下にあげる4つの研究課題をたてた。

- (1) 公立の小中学校に通うブラジル人児童生徒の日本語及び母語での教科学習の習得状況はどうなっているか。そして、それに滞在年数と来日年齢がどのような影響を与えているか。
- (2) 日本で、ポルトガル語での教育を行っているブラジル人学校に通う児童生徒の教科学習の習得は順調に進んでいるだろうか、また、彼らが日本でおかれている状況はどのようなものなのか。
- (3) 公立の中学校、公立(私立)高等学校に通うブラジル人児童生徒一人一人の心理的状況は、実際どうなのか。また、高校進学の際を握るものは何であるか。
- (4) 外国人児童生徒を実際に指導している教師はどのような意識をもって指導にあたっているのか、何が問題となっているのか。

これらの4点を明らかにすることにより、ブラジル人児童生徒の現状を把握でき、そこから今後の教科学習に関する提案を行うことが可能になると考えた。

調査結果は、以下の通りである。

公立の小中学校に在籍するブラジル人児童生徒の教科学習の習得の程度を把握するために行った日本語と母語の両言語による算数の文章題テストの結果より、ブラジル人児童生徒は算数文章題の理解において、日本人児童生徒に比べて非常に遅れていることが明らかになった。また、母語での算数文章題の理解も進んでいないことがわかった。ブラジル人児童生徒は滞り8年以上経っても算数文章題の理解が進んでおらず、来日年齢が高いブラジル人児童生徒は、来日年齢が低い児童生徒よりも、両言語での算数文章題の理解ができているという結果が得られた。

ブラジル人学校での調査から、ブラジル人学校に通う児童生徒全てが、ポルトガル語での教科学習が順調に進んでいるわけではなく、以前日本の公立の小中学校に在籍していた児童生徒は、ブラジル人学校で母語（ポルトガル語）での教科学習を始めても、教科学習を順調に進めることが難しい。また、ブラジル人学校に通うブラジル人児童生徒も公立の学校に通うブラジル人児童生徒と同じく、保護者の教育に対する意識の低さや、日本での将来的展望が開けていない状況など、共通する問題が存在していることがわかった。

ブラジル人生徒への面接調査によるケーススタディーから、ドロップアウト傾向が強い、またはドロップアウトした生徒のケースには、中学校での教科学習の補充が不十分であるケースや、両親の帰国予定が立っていないため将来に対する心理的な不安を抱き、将来の夢を持つことが難しく、日本語での教科学習に意味を見出すことが難しいといったケース、自分が日本人にもブラジル人にもなれないということでも不安定な精神状態となっているケースなどがあつた。また逆に、ドロップアウトの心配がない生徒のケースには、両親が日本での永住を決めているケースや、両親が子どもと将来について常に話し合っているケースがあつた。高校進学の際となるものとしては、両親の進学に対する意識の高さや、個人的に熱心に指導をしてくれた教師というようなキーパーソンとの出会いなどが高校進学の際となつていたことがわかった。

教師対象のアンケート調査の結果から、以下のようなことが明らかになった。教師全体的な傾向として、来日年齢が低いほうが日本語での教科学習内容の理解には有利であると捉えている。これは、来日年齢が低いために母語の発達が進まず、

その母語力の低さが日本語力や、日本語での教科学習にどのようなマイナスの影響を与えるかという知識を教師が持っていないことを意味し、大変重要な問題である。また、外国人児童生徒への心理的サポートや学校以外での支援の必要性、教師の時間不足などを教師たちは強く感じてはいるが、そのために具体的に行動するには時間不足などの障害がある。

中学校教師よりも小学校教師のほうが、日本語での教科学習内容理解と母語での教科学習内容理解の関連性が強いこと、来日年齢が低いことが日本語での教科学習内容理解には有効であること、長い指導時間を要する指導の必要性を強く感じていることなどが明らかになった。小学校教師よりも中学校教師のほうが、外国人児童生徒の日本語での教科学習における動機の低さを強く感じていることが明らかになった。

外国人児童生徒に個人的に接する時間が長い日本語教室担当教師は、個人的に接する時間が短い担任(教科担任)教師に比べ、日本語での会話力と教科を理解する力を別のものとして捉えており、担任(教科担任)教師は滞在年数が長くなれば教科学習についていけるようになると捉えていることがわかった。また、日本語教室担当教師のほうが、心理的サポートの必要性、地方自治体などの学校以外での支援の場や教師の研修の場の必要性を強く感じていることが明らかになった。

以上の調査結果から、ブラジル人児童生徒の教科学習に関する提案として、以下の3点をあげた。

1. 身近なところで問題を共有することからはじめる学校と地域の連携の重要性
2. ブラジル人児童生徒を1人の人間として「個人的に関わることの重要性」
3. 研究者と学校側が連携をとり、今後は学校の教師との協働研究を進めていく「教育と研究者との協働による支援活動」